も実は、沖ノ島は糸島二見ヶ浦海岸からは見えないのだ。なぜなら、距離が離れすぎているため(地球が丸いため)、沖ノ島は水平面の向こうなのである。そのことを示す計算式がある。

観測者の標高から水平線までの距離を割り出す計算式である。これによると水平線までの距離を x、観測者の海面からの目の高さを h（単位は m）とすると、x(m)=3570 ×√h(m) で算出できるそうだ。糸島二見ヶ浦から沖ノ島までは、直線距離約 65km である。この式に当てはめると、65000 = 3570 × √h (m)　答えは h = 331.5m

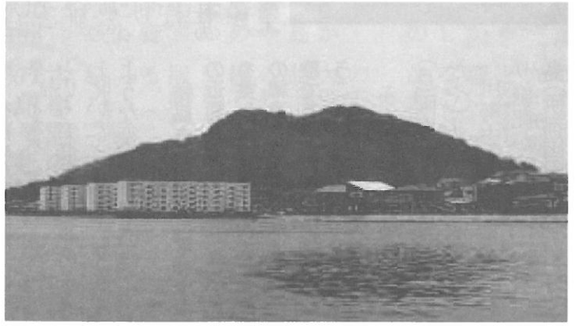
つまり、二見ヶ浦の海岸線の標高 331.5m の高さから見て、やっと沖ノ島の海岸が見えることになる。逆に言えば、二見ヶ浦の海岸線から沖ノ島の位置だと標高 331.5m より下は見えないことになる。沖ノ島の主峰一ノ岳は 243.6m であるから、糸島二見ケ浦の海岸からは沖ノ島は見えないのである。まさに、海底に沈む**興玉神石**である。

しかし、二見ケ浦でも山の上に登れば、沖ノ島の存在は確認できる。その高さは簡単に計算できる。331.5m − 243.5m = 88m。つまり、糸島半島北端の標高 88m 以上の山から沖ノ島は見えるのである。糸島半島の北端だけでも標高 88m を超える山はたくさんある。蒙古山(ムクリ山)、妙見山、灘山、大葉山、彦山、天ケ岳、柑子岳、火山などである。特に北端に近い灘山 209m と柑子岳 254m からは、博多湾も望める絶景が楽しめる。また、彦山 231m は、北は玄界灘、西は芥屋の大門や姫島、南は糸島富士とも筑紫富士ともいわれる可也山365mがそびえるのだ。これらの山からは、当然水平線の向こうから沖ノ島(おそらく元祖興玉神石)が顔を出しているのである。

また、伊勢志摩の夫婦岩を所有する二見興玉神社の神の使いはカエルである。カエルとは古事記の国産みの最後の六小島を産むときの「然しかありて後、還り坐ます時」の「還り」が「カエル」に転じたものであると考えることができる。まさにイザナミ神・イザナギ神が還るときに最後に造った島が、両児島(二見ケ浦の夫婦岩)であることの所以であるが、伊勢志摩ではその意味は忘れ去られ、「かえる」の音のみが二見ケ浦の祭祀とともに残っているため、「**蛙**」が伊勢志摩では神の使いになったということだろう。また、伊勢志摩二見ケ浦の夫婦岩の間から朝日が昇ることは全国的に有名だが、糸島の二見ケ浦は夫婦岩の間に夕日が沈むことは、(地元では有名だが)全国的にはあまり知られていない。糸島二見ケ浦では夕日が水平線に「帰っていく」のである。**太陽が水平線に「かえる」のは伊勢志摩ではなく、糸島(伊都志摩)の二見が浦の方である。**

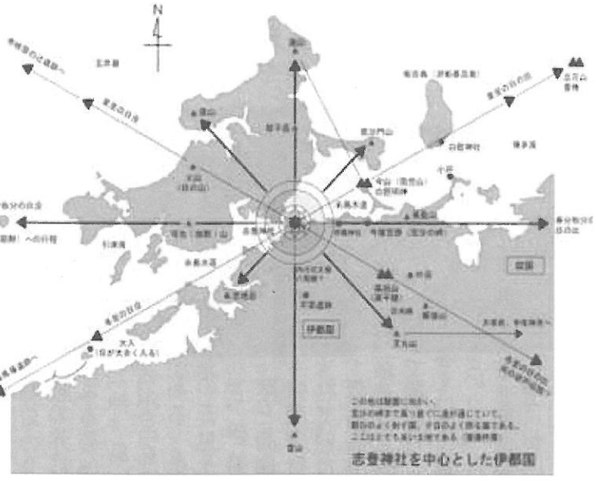
たかが、二つの岩礁であるが、イザナミ神・イザナギ神が「還り坐ます時」に産んだ最後の島、両児島(天両屋)として、十分な状況証拠を備えていることがおわかりいただけただろうか。

さて、いろんなサイトを見ていると、他に**参考になる**説があったので紹介しておく。それは、両児島ふたごじま(天両屋あまのふたや)＝今山説である(高原正伸氏？原田大六氏？)。今山は福岡市西区にあり、糸島半島の西岸に位置する。現在は海岸にたつ標高80m程の山であるが、弥生時代ここは陸繋島であったことがわかっている。明治・大正時代に盛んに玄武岩が切り出されたため、山の形が変わってしまったが、元々は双子のような二つの峯が並ぶ山であった。しかも、ここの玄武岩の採掘の歴史はかなり古く、弥生時代中期には今山産の玄武岩によって作られた石おのが、北部九州各地に流通していたことがわかっているのだ。



つまり、ここを抑えたのであれば、渡来軍はある意味、軍需産業の拠点を抑えたことになり、その戦略的価値は非常に高いともいえるのだ。また地理的にも糸島半島西岸にあり、博多湾に面しているので、多方面への軍団の展開が可能だ。

今山であろうと二見ヶ浦の夫婦岩であろうと、いずれにしても糸島半島の**一部であり**、魏志倭人伝にある伊都国となる場所にあたることが、その後の歴史を暗示している。



(左図：糸島漂泊傳改八濱漂泊傳　ダラシナイデラシネ記　高原正伸氏ブログより転写)

古代史スクラップ

九州初のろくろ穴
～大野城市上園遺跡～

福岡県大野城市教委は、九州最大の須恵器の窯跡群「牛頸窯跡群」に含まれる上園遺跡（かみその）から、古墳時代後期の工人集落跡が出土したと発表した。須恵器を成形するろくろを据えた穴が九州で初めて確認された。

同市教委は「窯の成立過程や作陶工程などの解明につながる貴重な発見」としている。牛頸窯跡群は須恵器の日本三大窯跡群の一つで、大野城市南部を中心に春日、太宰府両市を含む約四キロ四方に広がる。六世紀中ごろから九世紀前半まで須恵器を生産し、計約五千基の窯があったとされる。二〇〇九年窯跡群の一部が国史跡「牛頸須恵器窯跡」に指定された。上園遺跡は同窯群の北端に位置。今回の発掘調査で六世紀中ごろから後半の竪穴住居跡一〇棟、掘っ立て柱建物跡二棟などが出土。このうち掘っ立て柱建物（縦約六ｍ、横約十一ｍ）からろくろを据え付ける穴（深さ二十五㎝）が見つかった。上方が直径最大約四十五㎝のすり鉢状で下方が直径十八㎝の円筒形という、二段構造の穴の形が特徴だという。ろくろ穴の隣に粘土を貯蔵した穴や、集落内に粘土の貯蔵庫とみられる建物跡もあり、同市教委は「須恵器を成形した工房と確認できた初めての例」としている。小田富士雄・福岡大名誉教授（考古学）は「窯跡と今回出土した工人集落跡を合わせて研究できれば窯跡群成立の背景などの解明につながる。史跡として保存すべてだ」と話している。（西日本新聞　五月三十一日）

漆塗りの弓　複数出土
～古賀市谷山北地区遺跡群～

福岡県古賀市教委は、古墳時代後期（六世紀末～七世紀初め）の金銅製馬具が出土した同市の谷山北地区遺跡群で埋納坑から新たに漆塗りの複数の弓や鉄鏃（やじり）の武器、鉄製の鋤（すき）などの農具が出土したと発表した。

埋納された品は馬具以外にも多種多量におよぶことが判明。そばには「船原古墳があり、専門家からは「被埋葬者がこの地域の重要人物だった可能性がある」との見方が上がっている。

市教委によると、武器や農具は金銅製馬具が見つかった埋納坑で出土。弓は金銅製の鞍などの下に敷き詰められ、見た目は黒い漆膜状。飾り金具や先端に取り付ける金具「弭」（ゆはず）が確認されたことから弓と断定した。長さは推定二・二～二・三ｍで保存状態は良好。少なくとも六点はあるとみられ、市教委は「漆膜状の広がりからそれ以上あるとみられる。これだけの出土は珍しい」としている。木製の鐙も三組あったことが判明したため、少なくとも四組の金銅製馬具が埋葬されていたことがわかった。前回の調査と合わせ馬具に関する金銅製品は計三十点以上になった。埋納坑は七世紀初めの船原古墳から約五ｍ離れている。馬具が副葬品として古墳周辺に埋納された例がないことから注目を集めていた。今回、埋納坑が馬具専用でなかったことが裏付けられたという。

調査では、埋納坑の南西部分を逆Ｌ字状に発掘。二点の金銅製馬鈴や、用途不明の円盤状の鉄製品や金銅製の小型金具も出土している。今後、九州歴史資料館の協力を受け、詳しく調査する。

九州大学の西谷名誉教授は、埋納坑と船原古墳の関連について「埋納坑から多種多様な出土品が出たことで、船原古墳が当時、朝廷の直轄地「糟屋屯倉」が置かれた地域のトップクラスの古墳であった可能性も出てきた」と話している。（西日本新聞　六月八日）

その「一語」とあの「一文」の罪⑩

前田　和子

「都議選・自公全勝過半数」という記事が全国紙の一面トップを飾った日。その隅に「六十八年　なお基地の影　沖縄戦慰霊の日」の記事。うがった見方をさせてもらえば、加害者と被害者が、奇しくも同じ紙面に並んだような気がした日でした。

現実の日々の出来事とはこういうものなのでしょう。都会でもてはやされても、地方は負担ばかりが増えて、あずかり知らず。東京オリンピック招致を勝ち取って、高度経済成長という夢の世界に、再度私達をいざなうのでしょうか。

咲く事自体が夢ならば、散る事も出来ないのです。

そんな事より、投票率が四四％弱の過半数が、『過半数』とする民主主義はありなんでしょうか

投票しないのが罪というなら、そんな投票しない人々の思いをすくい取るすべは、どこにもないのでしょうか。そんな思いを抱えていたら、富士山の世界遺産登録決定のニュース。全てのメディアが一斉に盛り上げ、まるでお祭り騒ぎ。

喜ぶのは人間ばかりで、登山客が殺到し、御来光はラッシュとか。富士に少しばかり同情です。はるか遠い昔から、富士はそこにあったのですから。

「富士の頂角、広重の富士は八十五度。文晁の富士は八十四度・・・北斎に至っては、その頂角ほとんど三十度くらい・・・ニッポンのフジヤマをあらかじめあこがれているからこそワンダフルなのであって、そうではなくて、そのような俗な宣伝をいっさい知らず、素朴な、純粋の、うつろな心に、はたして、どれだけ訴えうるか、そのことになると多少、心細い山である。・・・・」

（十七ページに続きます）